

パプリカの夏秋どり栽培における遮光の影響

農業・園芸総合研究所

1 取り上げた理由

パプリカの夏秋どり栽培では、高温による落花や落果による減収を防ぐために遮光を行っている。しかし、遮光の強さや遮光時間の程度は曖昧になされている。そこで、夏季の高温期における遮光資材の利用がパプリカの果実生産におよぼす影響について検討したところ、遮光しない方がよい結果が得られたので参考資料とする。

2 参考資料

- 1) 宮城県の気象条件下では、夏季における遮光は行わず、日射量を確保することが収量増加につながる(表2)。
- 2) 商品果収量は遮光率が高く、遮光時間が長くなるほど減少する(表2, 図2)。
- 3) 遮光の影響は品種により若干の差が見られるが、ほぼ同様の傾向を示し、遮光が強いほど減収となる(表2, 図2)。
- 4) 遮光による葉温上昇抑制の効果は、遮光率が高く、遮光時間が長くなるほど高い(図1)。

3 利活用の留意点

- 1) 試験に用いた雨よけハウスは、側面が開放型の構造であったことから、ハウス内温度は気温とほぼ同様に推移し、高温による影響はほとんど無視できると考えられた(図1)。
- 2) 閉鎖部が多く風通しの悪いハウスでは換気に努めるなど、遮光以外の方法でハウス内の昇温を抑制する。
- 3) なお、整枝による草勢管理と果実への直達光による障害を防ぐため、葉を多め(側枝に葉を3枚)に残すとよい。

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名および研究期間

経営の幅を広げる水田転換畑用新規品目と栽培流通システムの開発(平成 16～20 年度)

2) 参考データ

表1 試験区の構成

試験区	資材の遮光率	遮光方法
1	-	遮光資材展張なし
2	40%	晴天時10～14時展張
3	60%	晴天時10～14時展張
4	40%	常時展張
5	60%	常時展張

遮光期間: 2005年7月1日～9月16日

遮光資材: 遮光率40% カネボウ製 タフベル

遮光率60% ダイヤテックス製 ふわふわ60

耕種概要他

雨よけハウス: 大きさ 幅3.0m,長さ10m,高さ2.3m 5棟
 設置方角 南北方向
 厚さ0.05mmのポリエチレンフィルムを屋根部のみ展張
 供試品種: 大玉 スピリット(赤) フィアウェイ(黄) (ENZA)
 中玉 ナザー(赤) ムルティー(黄) (DE RUITER SEEDS)
 播種日: 3月9日
 定植日: 5月26日
 栽植様式: 条間160cm 株間30cm 1条植え
 収穫期間: 8月下旬～10月下旬
 日射量測定: 最高位の展開葉にオプトリーフを設置し,
 7日間(2005年8月16～23日)での退色程度から算出
 葉温測定: 非接触型熱電対(オムロンES1D)で測定

表2 a当たり商品果収量

品種	無遮光	遮光率40%		遮光率60%	
		10～14時*	10～14時*	常時展張	常時展張
スピリット	408	258	249	301	147
フェアウェイ	264	243	169	255	108
ナザー	356	289	256	262	148
ムルティー	483	430	251	310	118

*:晴天時の10～14時展張

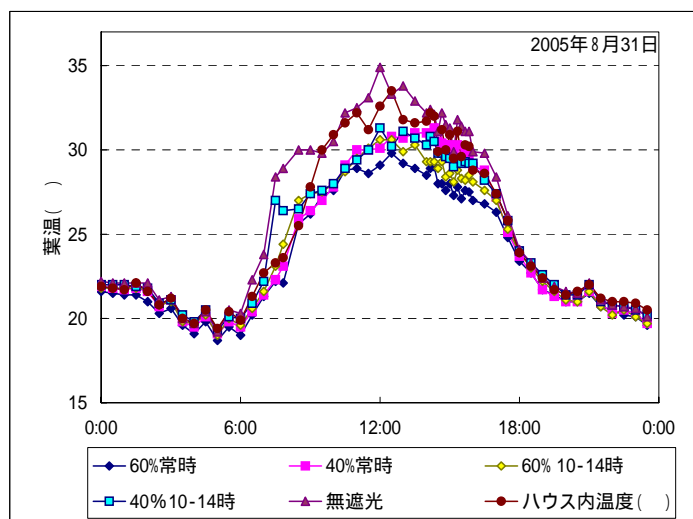


図1 最上位の展開葉における葉温の推移

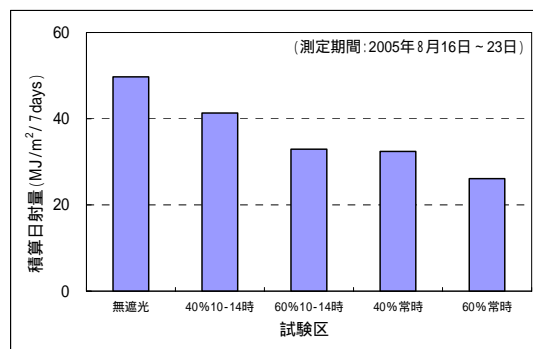


図2 最高位の展開葉における積算日射量

3) 発表論文等

なし

